

答 辞

今年も豪雪に見舞われ、二年続きの厳しい冬でした。寒さも峠を越え、陽射しにも春の温もりが感じられる本日、私達の為に盛大な「卒業式」を催して頂き、誠に有難うございました。

諸先生方のご指導により全教育課程を無事修了して、ここに栄えある卒業式を迎えることができましたことに心からお礼申し上げます。

思えば長いようで短い二年間でした。

職藝学院は、私にとりまして、退職後における有意義な人生を求めての、「建築」というこれまでとは全く畑違いの世界を学ぶ、新たな第二の人生の始まりでありました。

四十年ぶりの教室での講義や演習では、若者達に遅れまいと眠い目を凝らしながら懸命に聞き入りました。

真新しい道具の手入れから始まった実習、ここでは道具を取り扱うことの大切さ、正確で早くかつ美しく、物づくりにおけるミリ単位の隙間にこだわる職人魂を教わりました。

そして、環境職藝科と合同で取り組んだ「合科ワークショップ」。職場実習としての「校外工房実習」。実践道場における「川上から川下まで」「合掌造り世界遺産見学」「人と土の日」。進級製作として、皆で取り組んだ初めての一戸建て四畳半住宅。

一学年終りの京都研修旅行においては、先人が築いた自然造形を巧みに設えた優雅な日本庭園と、繊細かつ大胆、優雅な日本建築の数々を目の当りにし、これら日本が世界に誇る伝統の技を継承していくことの重要性を強く認識させられました。

二年生になると、家具工房物置などの新築や、神社・寺院の修復に係る学外での実践的な実物実習。

また頭を悩ませた設計コンペや設計製図、規矩術等の諸課題の作成。

そして、二年間の集大成として精魂込めて取り組んだ卒業製作等々、顧みますと思えば尽きず、辛いこと、楽しかったこと、いろいろありましたが、その一つ一つはいつも新鮮であり、有意義なものとしてこの身に深く刻まれてきました。

これから私達は慣れ親しんだこの学窓を離れ、それぞれの道へと巣立ちます。

ここで学んだ知識や技能は、この世界へ踏み入った第一歩にすぎません。

今後は、稲葉理事長・尾島学院長はじめ、諸先生方など、この学院において学んだ数々の教えを「礎」として、社会に貢献できますよう、更なる知識の習得と技能の研鑽に努め、希望を胸に邁進致します。

どうか私達を末永く見守って下さいますよう御願致します。

おわりに、本日ご列席頂きました来賓各位、諸先生方の御健勝、並びに御多幸を心よりお祈り致しますと共に、職藝学院の今後益々のご発展を祈念致します、「答辞」とさせていただきます。

平成二十四年三月二十日

職藝学院 建築職藝科

卒業生代表

池川 和雄